「社会知性」を体現する校友たち

わ れ ら 専 修 人

File No. 175

俳優
大鹿礼生さん
（平30・国経）

おおしか・らいき●神奈川県出身、1996年生まれ。3歳からヒップホップを始め、ダンスや声楽、演技などのレッスンも受ける。子役のとき劇団四季『ライオンキング』のヤング シンバ役として出演。専修大学経済学部国際経済学科卒業後、劇団四季の研究生となり、翌年劇団員へ。2019年9月『リトルマーメイド』で初舞台を踏み、2022年4月から『バケモノの子』蓮／九太（青年）役、2023年9月から『ライオンキング』シンバ役を務める。

劇団四季『バケモノの子』 撮影：阿部章仁

「初めて『ライオンキング』の舞台に立ったときは、ものすごく緊張していました。でも、カーテンコールで客席が明るくなって、お客様みなさんが拍手してくれているのを見て、『この仕事っていいな』と。このときに舞台の魅力に目覚めたのかもしれません」

小学５年生で、劇団四季のディズニーミュージカル『ライオンキング』のヤング シンバを演じたときのことを大鹿礼生さんは、こう振り返った。↗

彼は、小学校低学年のときから芸能事務所に所属して、テレビドラマや映画、CMなど映像を中心に仕事をしていた。ヤング シンバ役は、そのような仕事の１つとしてオーディションで勝ち取った役だった。だが、観客を目の前にして生の反応に大きな感銘を受けたことで、それ以降、舞台の仕事が増えていったという。ある舞台では、今も尊敬している俳優との出会いもあった。

しかし、中学２年で俳優引退を決め、芸能学校から公立学校へ編入し、普通の学生へと戻っている。

「子供ながら燃え尽きたのかもしれません。『もう、いいかな』と思ってしまったんです。だから、事務所もきっぱりやめて、高校も普通に受験して進学しました」

高校では軽音楽部に入り、友人とバンドを組んでライブをするなど、多感で貴重な時間を普通の高校生として、充実した時間を楽しんだ。その間、芸能の世界に戻りたいと考えることはまったくな↙

全員で作品を成長させていく。その面白さこそ、演劇の醍醐味だ

劇団四季の俳優たちが、稽古やレッスンなどを行っている四季芸術センター。
そのエントランスで取材陣を気さくに迎えてくれた大鹿礼生さん。子役として芸能の世界に入り、
一時引退してから再び俳優の道を歩み始めることになる彼にとって、専修大学での４年間はどのような時間だったのか――
劇団四季への入団理由や俳優業の面白さなど、いろいろ伺いました。

かったという。その状況に変化が訪れたのが、専修大生のときだった。

大鹿さんが専修大学を進学先に選んだのは、オープンキャンパスで生田へ訪れたとき、緑が多い環境に開放感を感じたからだ。在籍していた高校に指定校推薦枠があったことも後押しとなった。

入学後は勉学にも勤しみ、半年で奨学金の対象に選ばれている。高校のとき同様、軽音楽研究会に入りバンド活動を続けたというから、大学１年のときは高校生のときと変わらず、普通の大学生活を楽しんでいたのだろう。しかし、その内面では、「やりたいことが見つからなかった」と当時を振り返っている。

「好きなことをしなさい」。恩師の言葉に背中を押されて

そんなとき、子役時代にお世話になっていた芸能事務所から裏方としてアルバイトをしないかという誘いが届いた。

「話を聞いたときは、もう一度俳優業をしようなどとはまったく考えていませんでした。仕事も裏方ですし……。でも、久しぶりに間近で大きな舞台や会場を埋めるお客様、スポットライトを浴びて演じる俳優さんたちの姿を見て、私は『あの世界がすごく好きだったんだな』と再確認したんです」

俳優への思いが再燃し、舞台を中心に俳優業を再開した。ただ、この頃は、「学生の間、趣味の域で続けていければいい」という軽い気持ちだったそうだ。

そこから俳優を仕事として選ぶことになったのは、「ゼミの先生だった尊敬する室井（義雄・2023年３月31日退職）教授の言葉に背中を押された」からだった。

室井先生は経済学部の教授でナイジェリア社会経済史などを研究テーマとしていた。そのため、アフリカへ行くことも多く、「ちょっとケニアに行ってきた」と現地の話を披露してくれるなど、講義がとても面白かったのだという。

「ゼミ生も、個性的で自由を愛するメンバーが集まり、海外へ行く人などもいて、刺激を受けていました」

そろそろ大学卒業後の進路を真剣に考えないといけない時期になったとき、俳優の道へ進むのか、企業に就職するべきなのか決められず迷っていた。そこで、室井先生に相談したのだという。

「母親はあまり俳優の道には賛成していませんでした。安定した仕事に就いてほしいと思っていたからです。そんなとき一番信頼している先生に『好きなことをしたほうがいい』といってもらえたことが（進路選択の上で）すごく大きかった」

劇団四季『バケモノの子』のワンシーン　撮影：阿部章仁

劇団四季へ進もうと思ったのは、研究生として１年間みっちりとレッスンを受けられることも理由の１つだった。子役を経験していたとはいえ、中高、そして大学の途中までという長いブランクが不安の種になっていたからだ。また、劇団四季の劇団員であれば、生活も安定する。心配している母親を、安心させることができるとも考えた。何よりも、好きなミュージカルに没頭できる環境に、大きな魅力を感じた。

「私は演じることが好きです。自分ではない誰かになれるところが面白いからです。ただ、軸にあるのは音楽が好きだということ。そのため、自分の得意なことを活かしながら、自分の可能性を引き出せるミュージカルが演劇の中でもっとも魅力を感じられるのだと思います」

劇団四季という明確な目標が定まったことで、趣味の延長線上で再開していた俳優業にも一層身が入った。長いブランクを少しでも埋めようと、レッスンにも気持ちが入っていく。そして2018年、多くの応募者の中からオーディションに合格し、研究生に選ばれたのだ。

作品を成長させられる醍醐味を味わえる

大鹿さんが蓮／九太を演じた『バケモノの子』は細田守監督の大ヒットアニメーション映画を、劇団四季が総力を上げてミュージカル化した作品だ。国内外で活躍する気鋭のクリエイター陣が集まり、脚本や演出、音楽、舞台装置にまで趣向を凝らした舞台は、大きな話題を集めたのでご存じの方もいるかもしれない。

これだけの作品であるにもかかわらず、キャストを決めるためのオーディションに参加するかどうか、大鹿さんは最初悩んでいた。劇団四季では、基本的にキャストはオーディションによって決定する。そのオーディションに参加するかどうかは俳優の意思に任されていたからだ。気持ちが前向きになったのは、周りの先輩たちに「役に合っている」と言ってもらい、映画を見たからだった。

「九太と自分の感性が近いというか、性格もちょっと似ているところがあるなと思えたんです。普段あまりしゃべらないところとか。わたしはシャイなほうで、あまり自分から話すのが得意ではないので。これなら役を演じるために頑張るのではなく、役が自分に近づいてきてくれるというイメージを持てました」

実際、演出家からも「そのまま演じてくれればいい。あえて、何もしないでくれ」と言われたそうだ。

しかし、演じることで役の理解が深まっていくと、自分とは異なる部分も見えてきた。例えば、大鹿さんは家族の前であまり話すタイプではないが、九太は言いたいことがあれば、しっかり伝えるタイプだった。

「どうしたら家族にも言いたいことをしっかり言える九太を演じることができるのか。自分なりにいろいろ考え、周りの反応を確かめながら、もっと九太らしい九太とは何かを模索していきました」

このように俳優同士やクリエイターなど、作品に関わる人たちと意見を出し合いながら、より良い作品を追求していけるところが演劇の魅力の一つだという。

『バケモノの子』大阪公演に向けて、意気込みを熱く語る大鹿さん

「ミュージカルの場合、演技だけでなく、そこに歌とダンスが絡まってきます。それはつまり、他の演劇よりも多くの人たちが力を合わせて“良い作品”をつくり上げていく面白さがあるということ。特に『バケモノの子』はオリジナルミュージカル作品ということもあって、余白のようなものがたくさんあります。自分たちで成長させていける作品――そこに楽しさを感じていました」

試行錯誤と稽古を繰り返し、「これならお客様に楽しんでいただける」と思えるところまで仕上げた状態で本公演に臨むわけだが、それでも本番で思うようにいかないこともある。逆に、相手役の反応がとてもよく「今日はうまくいった」と手応えを感じることも。「生モノ」である舞台で、そういった経験を少しずつ積み上げながら千秋楽まで舞台に関わる人たち全員で意見を出し合い、少しでも良い作品にしようとあがくのも、演劇の醍醐味なのだという。

「こうしてみんなとつくり上げた作品をお客様に観てもらい、楽しさや喜びなど、何か感じ取っていただければ最高です」

東京公演は2023年３月で終了したが、12月からは大阪公演が控えている。

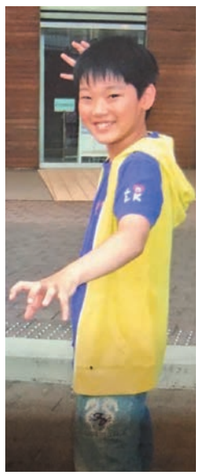
「東京公演でやりのこしたことはありません。そのくらい全力でやり切ったという自負があります。でも、大阪でやるからには、さらに良いものをつくりたい。東京が良かったからといって、そこに満足せず、また一から新しい作品をつくる気持ちで、みんなで意見を出し合っていきたいと意気込んでいるところです」

そして、「必ずやより良い『バケモノの子』をお届けするので、ぜひ観に来てください」と笑顔で続けてくれた。

「この作品は、日本産です。日本で生まれたアニメーションが原作で、歌詞やセリフも和訳ではなく、音楽も日本語のためにつくられています。そのため、ミュージカルは難しいとか、くすぐったいと思っている方でも、それほど違和感はないはず。舞台美術や舞台装置、演出にもかなりこだわっていて、子どもが観ても飽きることがありません。ご家族みんなで楽しめる作品になっています」

常に仲間たちとともに磨き上げ、回を重ねるごとにより良い作品へと進化する舞台。同様に輝きを増していく、大鹿さんのこれからも非常に楽しみだ。

（2023年8月取材）



小学生の頃から子役として活躍

黒門の前で卒業記念に撮影

劇団四季のチケットに関する総合案内
https://www.shiki.jp/tickets/

オリジナルミュージカル『バケモノの子』
大阪四季劇場（大阪市北区梅田）にて、
2023年12月10日（日）に開幕